

公益信託世田谷まちづくりファンド

第32回助成事業 審査講評

まちづくり活動部門

【2回目応募グループ】

< 3-1 社会福祉法人せたがや櫨の木会上町工房 >

- ・イベント開催に取り組む中で、近隣との関係をつくり、街全体を魅力的にする、有意義な活動だと思います。反面、助成金の多くを使っただけの記録やSNS等での発信の費用対効果は、仮に自腹であっても、それだけの費用をかけてする価値があったかどうか、助成金を使うからこそ、かえって厳しく自己評価すべきではないかと感じました。活動報告では、その点についても言及していただければと期待します。

< 3-2 NPO法人親子サポート一本の樹 >

- ・多世代交流の取り組みとして誰でも入りやすく、共感しやすく、素晴らしい取り組みだと感じます。多くの方々に働きかけて実践されているNPOの皆様のご努力は大変なものと察しますが、コミュニケーション醸成を課題と考える他の地域でも取り入れやすい、一つのモデルとして確立されつつあると思います。さらなるご活躍を期待しています。

< 3-3 太子堂ワークショップ準備室 >

- ・小学校を拠点として、地域の小学生に、地域の力で新しい学びや体験を提供する素晴らしい取り組みです。この体験をきっかけに、地域住民が小学生をゆるやかに見守るような関係性がより深まると良いですね。近隣小学校との連携なども実現するとより広がりが出て素晴らしいと思いますので、今後のチャレンジを期待します。

＜ 3－4 せたがや養生倶楽部（森・心・からだ） ＞

- ・昨年度の活動を経ての活動方針、体制の変更、ということですが、正しく試行錯誤していれば、そうしたことが起こるのは当然のことと思います。しかし一方、当事者としてはそうではなくても、一貫性がないように見られてしまったり、活動の主旨や意義がわかりづらいと見られてしまうこともあることと思います。自分（たち）にとってどうであったのかを語っていただくことで、活動の意義がより伝わりやすくなるのではないかと思います。

＜ 3－5 話そうじゃないか ＞

- ・労働組合のチャンネルと、地域のチャンネルで、それぞれで他者とつながり、普段は出会うことのない、それぞれの人たちをまぜあわせるような役割を「話そうじゃないか」ができれば素晴らしいと思います。

＜ 3－6 S O P H ＞

- ・まだ活動2年目ですが、少しずつ実績を積み、反省を繰り返してSOPHの理想像に近づいているのではないのでしょうか。公開審査会でも委員から指摘があったように、WebやSNSを用いた広報が課題のように思います。まちづくり活動を広げるポイントは、自分たちが普段リーチできない層へ如何にして働きかけられるかですが、他団体とのコラボレーション（例えば、場づくりを主体とした団体へソフト面の活動提供など）も検討してみてください。

＜ 3－7 まほろばB A S E ＞

- ・助成金の活用で試行錯誤がいくらかでも早く進展し、目標とされている食堂出店の実現を願います。言うまでもなく出店にはリスクがあり、どんなプロでもお店を続けることは簡単ではないでしょう。高齢者、といったテーマがあればこそ、あえてそれはずして、人が集まる、持続できる食堂とはとはどういうものかを知ること必要かもしれません。まちづくりや福祉といった文脈とは関係なく出店している飲食店のなかにも、高齢者を含む多世代が活躍し、また常連となり、そこを起点に交流したり活動したり、助け合いが生まれているお店も少なくはないはずです。

< 3 - 8 おやこフシギ発見クラブ >

- ・演劇ワークショップという特色ある手法によって、親と子の関係を豊かにする取り組みはとても興味深いです。今回は商店街などまちを巻き込んだ活動に広がっていていることはすばらしいと思います。魅力ある取り組みだからこそ、参加者同士のコミュニティの広がり期待すると同時に、支えるメンバーを増やし、組織基盤の強化にも期待しています。

< 3 - 9 特定非営利活動法人 C F F ジャパン >

- ・団体の既存事業である海外ボランティアプログラムの経験値を活かした、CFF独自の事業スタイルへ発展していくことを期待しています。世田谷にも、子育てにおいて課題を抱えている海外ルーツの親子が多く生活していらっしゃるはずで、それらの人たちに訴求していくためには、一般的なWebやSNS広報では不十分かもしれません。世田谷区の多文化共生・国際交流の担当者や海外ルーツの親子へヒアリングすることも検討ください。

< 3 - 1 0 世田谷マップD Xプロジェクトチーム >

- ・古地図や地形図、航空写真などをレイヤー状に重ね合わせることで、土地の変化が浮かび上がってきます。世田谷としての資料性の高さは推して知るべしですが、どのような目的で何に着眼するか、場の読み解きや気づきへの誘導などを見据え、さまざまなコンテンツ展開など、先の運用をイメージして考えてみて欲しいと思います。期待しています。

< 3 - 1 1 サステナキッチン >

- ・2024年のジェンダー・ギャップ指数において日本は146か国中113位という現実の中で、地域の中でジェンダーフリー、ストレスフリーな社会構築を目指した活動の入り口としてパパと子どもで「家に持ち帰る料理を作る」講座はとてもわかりやすいと思いました。一方で本気でジェンダーフリー、ストレスフリーな社会構築につなげて行きたいのなら講師とお客さんのサービス提供モデルでは限界を感じるのでコミュニティをオーガナイズするための戦略を構築する必要を感じました。